

## 色はいろいろ

### 1. キイロスズメの幼虫

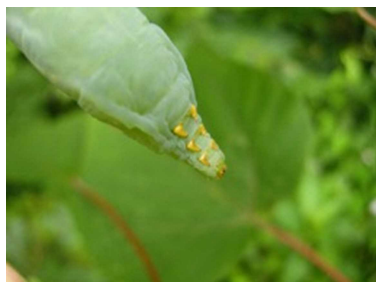
名前に黄色いスズメと付いていても、鳥ではなくスズメガの仲間です。成虫は夜行性ですので、街灯に来ているものを見る以外会うことはないと思います。ところが、幼虫には打吹山でもよく出会うのです。ヤマイモの葉が突然なくなったように感じてよく見ると、8 cmくらいもある大きなイモムシがヤマイモのつるに付いているからです。

ツンと突き出した突起があることがスズメガの幼虫の特徴ですが、そこは腹端なので「尾角」と呼びます。大きさと形状で危険な生き物



キイロスズメの緑色型幼虫

に見えますが、刺したりしませんし、毒もありません。見えている大部分は腹部です。尾角の反対側の細くなっている部分が胸で、その先に小さな頭部があります。左の写真の黄色く見えている部分が胸にある3対の脚で、成虫になれば長くなるものです。危険を感じると頭は中へ引っ込めてしまいます。



キイロスズメの幼虫の  
胸部と3対の脚

腹部側面の斜め模様は同じなのですが、緑色、褐色と体色の全く異なる幼虫がいます。別種かと思うほどの



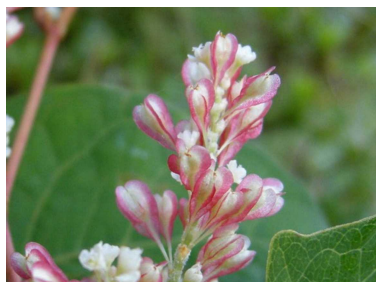
褐色型幼虫

違いですが、同じキイロスズメの幼虫なのです。色の違いというものは、種を分ける基準にならないことがよくわかります。あまりにも色や斑紋等が違い、長い間別種とされていた種が、同じ親が産卵したものを飼育した結果、色彩の異なる子が生まれたことで同種であることがわかった例もあります。

### 2. イタドリの花と実

日当たりの良い荒地ならどこでも見られるイタドリですが、花の時期から実となった今でも美しいなと思う株があります。赤花にたいして「名月草(メイゲツソウ)」と名付けるくらいです。打吹公園の東入り口近くの個体は特に赤色が強い個体でしたが、残念ながら2018年なくなりました。小鴨川の堤防でも赤花個体の群落があり、中秋の花の時期には目立ちます。

タデ科の多年草で、土中にはオレンジ色の長大な地下茎を伸ば



赤花のイタドリ (メイゲツソウ)

していますから、毎年同じ場所で見ることができます。地下にたくさんの栄養を蓄えていますので、地上部を刈り取っても枯死させることは至難の技です。観賞用に持ち込まれたイギリスでは在来種を駆逐し、アスファルトを破るなど被害も出ていて、駆除対象になっています。



翼を持つイタドリの実

株が大きくなると、たくさんの実をつけ、風で運ばれるように翼を持っていきますので、湿った荒地ができるとすぐ生えてきます。新芽を食べるだけでなく、色の個体差は茎や葉にも現れますので、遊歩道を歩きながら観察してみましょう。